

新潟県内における幼稚園の教育目標（2）

中野啓明

新潟青陵大学看護学科

Educational Goals of Kindergartens in Niigata Prefecture (Part 2)

Hiroaki NAKANO

NIIGATA SEIRYO UNIVERSITY
DEPARTMENT OF NURSING

Abstract

In “Research Reports of Niigata Seiryō Women's Junior College” in 1993, I announced the thesis of “Educational Goals of Kindergartens in Niigata Prefecture (Part 1)” based on the questionnaire survey which had been executed for the kindergarten in the Niigata prefecture in 1992. Afterwards, *National Curriculum Standards for Kindergartens* were revised in 1998.

So, the main purpose of this paper is in the search how for educational goals changed through the revision of *National Curriculum Standards for Kindergartens*.

“Happily” has been used as a content of the expression of educational goals in the most a lot of kindergartens since 1979. However, the use rate decreases from 74.9% to 38.5%

Key words

National Curriculum Standards for Kindergartens, educational goals

和文要旨

平成5年に発行された『新潟青陵女子短期大学研究報告』において、私は、新潟県内の幼稚園を対象に平成4年に実施したアンケート調査をもとに、「新潟県内における幼稚園の教育目標（1）」という論文を発表した。その後、幼稚園教育要領が平成10年に改訂された。

本稿の目的は、今回の幼稚園教育要領の改訂を経て、新潟県内における幼稚園の教育目標が、どのように変化したかを探ることにある。

新潟県内の幼稚園の教育目標の表現内容は、昭和54年以来、「仲よく」が最も多くの幼稚園において使用されている。しかしながら、使用率は、74.9%から38.5%に減少している。

キーワード

幼稚園教育要領、教育目標

I 問題意識

学校の教育目標の設定と評価を実際にどのように行い、どのように理論化すればいいのか。この問いに対する貴重な先行研究がある。中川幸次が著した『学校の教育目標——設定から評価への構想と実際——』⁽¹⁾である。

中川は、この著書の第7章「戦後における学校の教育目標の推移」の中で、各学校の教育目標の実例に基づいて、設定（改訂）の推移、表現内容と表現型の推移、幼稚園・小学校・中学校・高等学校の教育目標の関連等について調査研究を行っている。

私は、この調査研究の成果を高く評価したい。というのも、各学校における実際の教育目標そのものを対象にするという具体的なレベルでの調査研究は、ほとんど行われてこなかったからである。中でも、幼稚園の教育目標にまで調査対象を広げていることは、注目に値する。なぜならば、従来、教育目標といえば小学校・中学校のそれが中心であり、幼稚園の教育目標の実際を伺い知ることはほとんど不可能であったからである。

しかしながら、中川の幼稚園の教育目標に関する調査研究には、以下の問題点がある。

- (1) 調査対象が公立幼稚園に限定されており、私立幼稚園が含まれていない。
- (2) 小学校、中学校に関しては教育目標の表現型が示されているが、幼稚園に関しては示されていない。
- (3) 小学校、中学校に関しては教育目標の設定（改訂）の時期が示されているが、幼稚園に関しては示されていない。
- (4) 現行の教育目標に関する継続期間の見通しについての調査が行われていない。
- (5) 教育目標の評価を行っているのか、いないのか、もし行っているとしたら、誰が、いつ行っているのかについての予備調査及び先行研究調査が行われていない。

そこで、私は、中川の研究における以上の問題点を克服することをめざし、平成4（1992）年10月～11月に実施した調査をもとに、以下の点を明らかにした。⁽²⁾

- (a) 回答のあった82園中の表現型では、

「3項目型」が28.1%と最も多く、次いで「主文＋副文型」が25.6%、「1項目型」が20.7%であった。一方、「4項目型」は12.2%、「2項目型」は7.3%、「5項目以上型」は4.9%であった。

- (b) 各幼稚園が最も多く使用している表現内容は「仲よく」であり、約半数の幼稚園が使用していた。この「仲よく」という表現内容を使用している幼稚園は、昭和54年度に中川が行った調査においても74.9%であった。したがって、新潟県内の幼稚園の教育目標の表現内容としては「仲よく」が他の表現内容よりも高いといえる。

また、平成4年の調査では、「仲よく」「健康・丈夫・健やか」「明るく」「考え」「元気」という上位五つの表現内容を、3分の1以上の幼稚園が使用していることを明らかにした。

- (c) 5年以内に教育目標を改訂もしくは設定している園は、40%前後であった。一方、「11年以上前」「わからない」の比率は、50%近かった。
- (d) 現行の教育目標の継続期間の見通しとしては「未定」が最も多く、半数を占めていた。一方、具体的な継続期間の見通しをもっている園は、10年間以内の場合では30%以内であり、11年間以上の場合を含めても40%に満たない。
- (e) 教育目標の評価を「行っている」と答えた園は66.7%であり、その評価時期は年度末の3月が最も多かった。また、教育目標の評価者が「職員全体」とであると回答したのは、75%であった。

小・中学校においては、学習指導要領の改訂ともなって教育目標を改訂する機会が多いという。⁽³⁾

それでは、幼稚園の場合においてはどのようなのであろうか。

おりしも、新しい幼稚園教育要領が平成10（1998）年12月に告示され、平成12（2000）年4月から実施されている。

本稿の目的は、今回の幼稚園教育要領の改訂を経て、新潟県内における幼稚園の教育目標がどのように変化したかを探ることにある。

Ⅱ 調査方法

1. 調査項目

平成4年の調査時に用いた項目と同じ項目を設定した。

- ① 現行の教育目標
- ② 現行の教育目標の設定の時期
- ③ 現行の教育目標の継続期間の見通し
- ④ 教育目標の評価の有無
- ⑤ 教育目標を評価する時期
- ⑥ 教育目標を評価する主体

なお、①と⑤に関しては自由記述式とし、②～④及び⑥に関しては選択肢を設けた。ただし、⑤に関しては具体的な月を記入してもらった。

2. 調査設計

新潟県内の全幼稚園163園へ、調査用紙を郵送する方式で行った。

調査時期は、平成13年12月1日～12月14日である。

有効回収数は65園（内、公立幼稚園31園、私立幼稚園34園）であり、回収率は39.9%であった。

Ⅲ 調査結果と考察

1. 教育目標の表現型

自由記述式で記入してもらった各幼稚園の教育目標を、平成4年の調査と同様に、中川の示している分類型を参考にして、六つに分類した。すなわち、「1項目型」、「2項目型」、「3項目型」、「4項目型」、「5項目以上型」、「主文+副文型」である。

「1項目型」、「2項目型」、「3項目型」、「4項目型」、「5項目以上型」、「主文+副文型」とは、次のような記述形式のものをさす。

— 1項目型 —

(例) 明るく元気でたくましい子

— 2項目型 —

(例) ・すなおな子
・明るい子

— 3項目型 —

(例) ○ともだちとなかよくあそぶ子
○やさしくおもしろい子
○たくましくげんきな子

— 4項目型 —

(例) ・なかよくあそぶ子
・やさしい子
・げんきな子
・豊かな子

— 5項目以上型 —

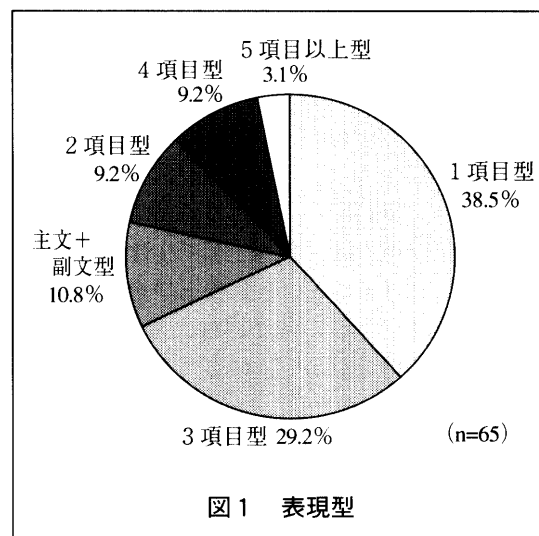
(例) 1. 豊かな心を持つ子
2. 健康な子
3. 誰とでも仲良く遊ぶ子
4. はきはきした子
5. きちんと挨拶する子

— 主文+副文型 —

(例) ○元気に遊ぶ子
・仲良く遊ぶ子
・やさしい子

今回、平成13年に行った調査において回答のあった65園の各型の設定率を、図1において示す。

回答のあった65園中の表現型では、「1項目型」が38.5%と最も多く、次いで「3項目型」が29.2%であった。



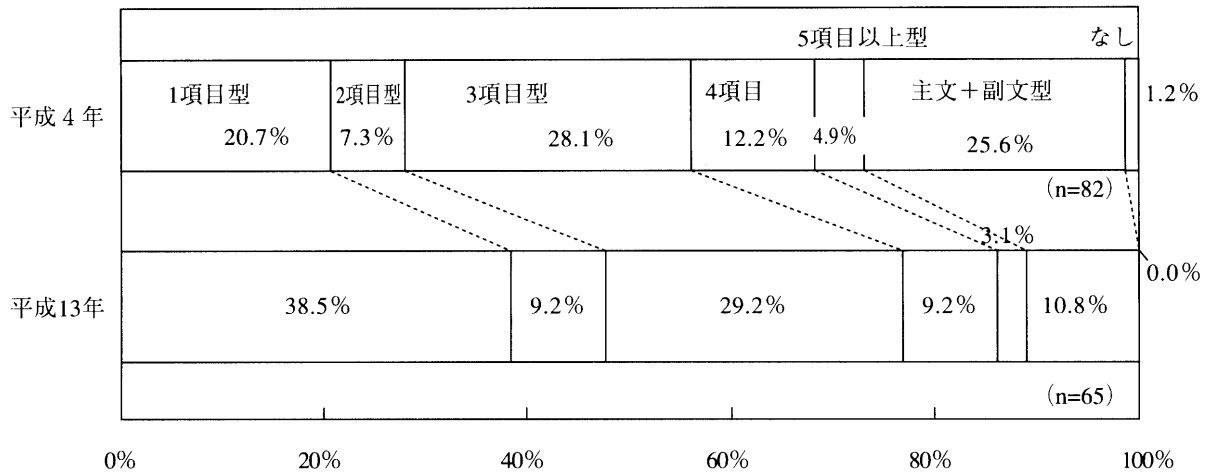


図2 表現型の比較

表現型に関して、平成4年の調査結果と比べたものが、図2である。

平成4年の調査においては「主文+副文型」が25.6%を占めていたが、平成13年の調査では、「主文+副文型」は10.8%にすぎなかった。

一方、「1項目型」は、20.7%から38.5%と、17.8ポイント上昇した。

なお、「主文+副文型」の中では、主文一つに対して副文三つの型が、その7割を占めていた。

2. 教育目標の表現内容

平成4年の調査と同様に、自由記述式で記入してもらった各幼稚園の教育目標を21種類の表現内容に分類した。

21種類の表現内容のうち、「仲よく」「健康・丈夫・健やか」「明るく」「考え」「創造・工夫」「元気」「がんばり・やりぬく」「自主・進んで」「話し・聞く・いえる」「生活習慣」「豊かな心」「思いやり」「たくましい」「表現」「やさしい」「のびのび」「素直」「強い」の18種類は、前回も用いた分類である。平成13年の調査では、この18種類に「行動」「楽しく」「いきいき」の三つを加えた。

なお、平成4年の時と同様、分析にあたっては、実際の記述が、“仲良く”であっても“仲よく”であっても“なかよく”であっても「仲よく」に含めるというように、記述の仕方が漢字であっても平仮名であっても一括して示した。

また、「豊かな心」については、“心ゆたかに”などの記述も含めた。

平成13年の結果と平成4年との結果を合わせたものを、図3において示す。

平成13年の調査においても、「仲よく」という表現内容がもっとも設定率が高かったが、その設定率は38.5%であり、平成4年と比べると15.2ポイント減少している。

「仲よく」に次いで設定率の高かったものが、「考え」の36.9%である。平成13年の調査において3割を越える設定率を示しているのは、「仲よく」とこの「考え」の二つのみである。

また、平成4年と比べ、10ポイント以上設定率が減少しているものは、先の「仲よく」に加え、「自主・進んで」「明るく」「健康・丈夫・健やか」である。

さて、それぞれの表現内容は、どの表現内容との組み合わせで使用される場合が多いのであろうか。それを探るために、21種類の表現内容間のクロス集計を実施した結果が、表1である。

10園以上で使用している表現内容の組み合わせとしては、「仲よく」と「考え」がもっとも多く14園で使用されており、次いで「仲よく」と「元気」が12園、そして「考え」と「健康・丈夫・健やか」、「考え」と「創造・工夫」、「考え」と「元気」がともに10園で使用されていた。

なお、21種類の表現内容の内、各園で使用

されている平均の個数は、3.2個であり、もっとも多い園で8個を使用していた。

ところで、設定順位はどのように変化しているのだろうか。

これを探るために昭和54年と、平成4年、および平成13年の調査結果を順位順にまとめたものが表2である。

過去3回の調査を通じて、もっとも設定率が高いのは「仲よく」であるけれども、その

設定率は昭和54年度の調査と比べると、ほぼ半減している。

また、「健康・丈夫・健やか」も上位三つの中に常に入っている。

さらに、「仲よく」「考え」「健康・丈夫・健やか」「元気」「明るく」「創造・工夫」という六つの表現内容がともに10位以内に入っている。

さらにまた、平成4年度の調査からは「豊

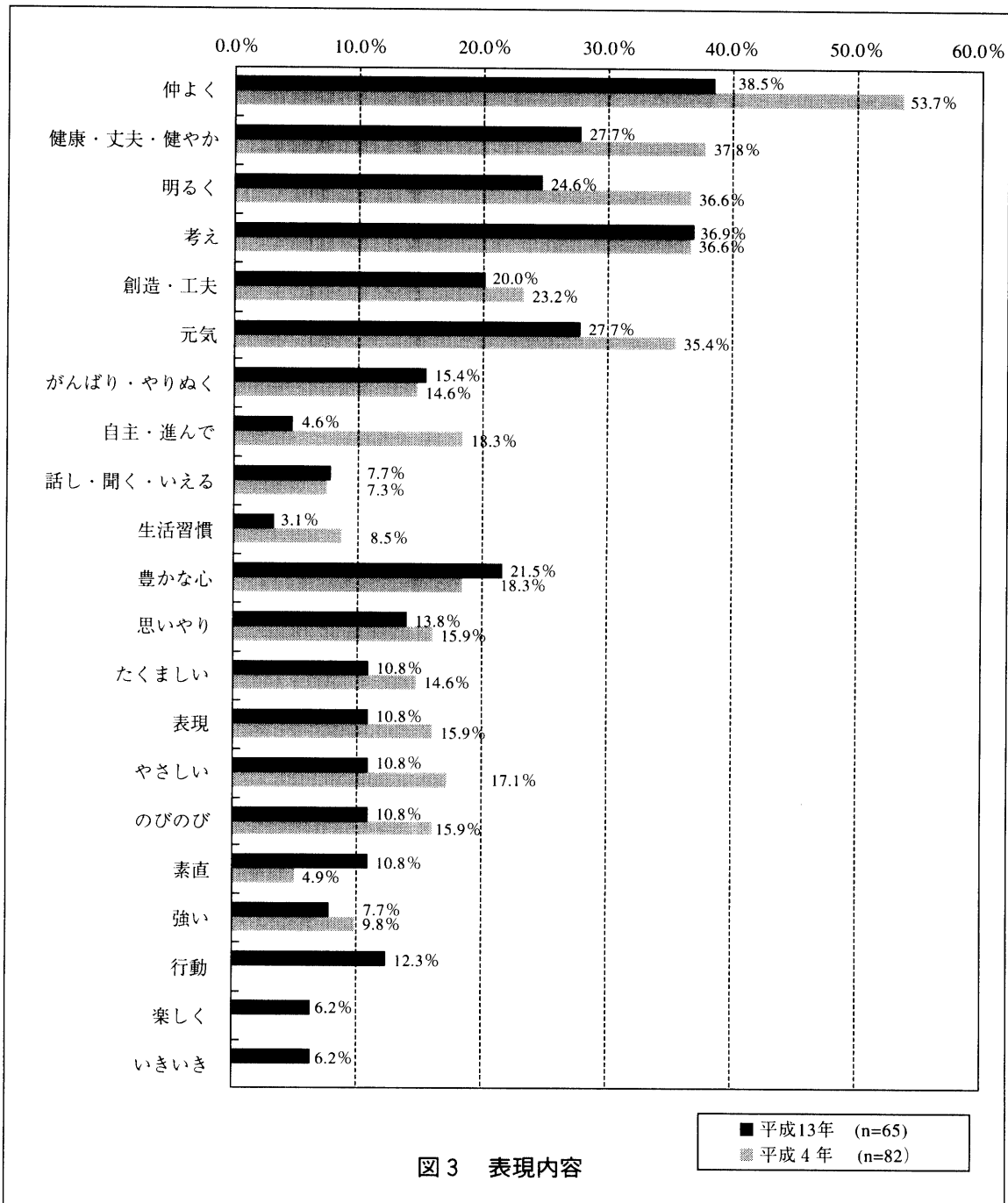


図3 表現内容

表1 平成13年度の調査における表現内容間のクロス集計（度数）

	仲良く	健康・丈夫・健やか	明るく	考え	創造・工夫	元気	がんばり・やりぬく	自主・進んで	話し・聞く・いえる	生活習慣	豊かな心
仲よく		7	5	14	8	12	6	1	1	1	4
健康・丈夫・健やか	7		7	10	8	1	5	1	2	0	8
明るく	5	7		8	4	5	2	1	1	0	4
考え	14	10	8		10	10	3	1	4	1	4
創造・工夫	8	8	4	10		5	3	1	2	1	2
元気	12	1	5	10	5		2	0	1	1	1
がんばり・やりぬく	6	5	2	3	3	2		0	0	0	1
自主・進んで	1	1	1	1	1	0	0		0	0	0
話し・聞く・いえる	1	2	1	4	2	1	0	0		0	1
生活習慣	1	0	0	1	1	1	0	0	0		0
豊かな心	4	8	4	4	2	1	1	0	1	0	
思いやり	5	1	0	4	1	3	1	1	1	1	1
たくましい	1	1	1	0	0	0	1	0	0	0	2
表現	4	3	1	4	0	2	1	0	0	0	2
やさしい	3	1	2	5	3	5	1	0	1	0	0
のびのび	2	0	4	1	1	2	0	0	1	0	1
素直	1	3	2	3	0	1	0	0	1	0	2
強い	3	1	3	3	0	1	0	0	0	0	2
行動	5	1	1	7	1	4	0	1	0	0	1
楽しく	0	1	0	2	0	1	0	0	1	0	1
いきいき	0	1	0	0	1	0	0	0	0	0	2

	思いやり	たくましい	表現	やさしい	のびのび	素直	強い	行動	楽しく	いきいき
仲よく	5	1	4	3	2	1	3	5	0	0
健康・丈夫・健やか	1	1	3	1	0	3	1	1	1	1
明るく	0	1	1	2	4	2	3	1	0	0
考え	4	0	4	5	1	3	3	7	2	0
創造・工夫	1	0	0	3	1	0	0	1	0	1
元気	3	0	2	5	2	1	1	4	1	0
がんばり・やりぬく	1	1	1	1	0	0	0	0	0	0
自主・進んで	1	0	0	0	0	0	0	1	0	0
話し・聞く・いえる	1	0	0	1	1	1	0	0	1	0
生活習慣	1	0	0	0	0	0	0	0	0	0
豊かな心	1	2	2	0	1	2	2	1	1	2
思いやり		1	2	2	0	2	1	2	0	0
たくましい	1		1	1	2	2	0	0	0	0
表現	2	1		1	0	3	1	2	2	0
やさしい	2	1	1		0	0	0	2	0	0
のびのび	0	2	0	0		1	0	0	0	0
素直	2	2	3	0	1		1	0	1	0
強い	1	0	1	0	0	1		0	0	0
行動	2	0	2	2	0	0	0		0	0
楽しく	0	0	2	0	0	1	0	0		0
いきいき	0	0	0	0	0	0	0	0	0	

表2 順位の変遷

昭和54年度調査			平成4年度調査			平成13年度調査		
順位	表現内容	設定率%	順位	表現内容	設定率%	順位	表現内容	設定率%
1	友達と仲よく	74.9	1	仲よく	53.7	1	仲よく	38.5
2	健康・じょうぶ	52.9	2	健康・丈夫・健やか	37.8	2	考え	36.9
3	明るく	49.0	3	明るく	36.6	3	健康・丈夫・健やか	27.7
4	よく考えて	39.2	3	考え	36.6	3	元気	27.7
4	創造性・工夫	39.2	5	元気	35.4	5	明るく	24.6
6	元気よく	37.2	6	創造・工夫	23.2	6	豊かな心	21.5
7	がんばり・やりぬく	31.3	7	自主・進んで	18.3	7	創造・工夫	20.0
8	自主性	13.7	7	豊かな心	18.3	8	がんばり・やりぬく	15.4
8	じょうずに聞き・話す	13.7	9	やさしい	17.1	9	思いやり	13.8
8	基本的な生活習慣	13.7	10	思いやり	15.9	10	行動	12.3
			10	表現	15.9			
			10	のびのび	15.9			

(n=51)

(n=82)

(n=65)

註) 昭和54年度の調査結果は、以下の文献をもとに作成した。

中川幸治、1990年、『学校の教育目標——設定から評価への構想と実際——』、栄町立栄中学校発刊事務局、142ページ

かな心」「思いやり」が10位以内に入り、平成13年度からは「行動」が10位に入っている。平成4年度まで10位以内に入っていた「自主・進んで」は、平成13年度からは10位以内に入らなかった。

設定率から見ると、昭和54年度の調査では、3割以上のものが7位までを占めていたが、平成4年度では5位まで、平成13年度では2位までと、高い設定率を示すものが減少してきている。これは、特定の表現内容に限定した使用法を避ける傾向が加速していると考え

られる。

なお、「仲よく」という表現内容は、たとえば、「友達と仲良く」「だれとでもなかよく」といった文脈で用いられているけれども、「男女ともなかよく」というような「男女平等教育」⁽⁴⁾「ジェンダー・フリーな教育」といった視点から用いられている例は見出せなかった。これは、年度の重点目標や教育課程との関連から見ても、今後検討するに値する問題といえよう。

また、「思いやり」という教育目標の表現

内容についても、こんにち、教育学でも注目されてきているケアリング(caring)から見ても、今後検討するに値する問題といえよう。¹⁵⁾

3. 現行の教育目標の設定の時期、及び継続期間の見通し

平成13年度の調査においても、いつ現行の教育目標が設定されたのか、また、設問「この教育目標を実施する機関は、どれくらいの予定ですか」で継続期間の見通しについての回答を求めた。

その結果を示したものが図4、図5である。

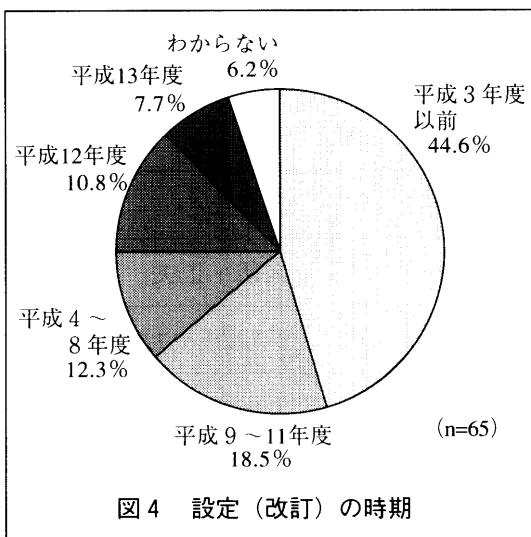


図4 設定(改訂)の時期

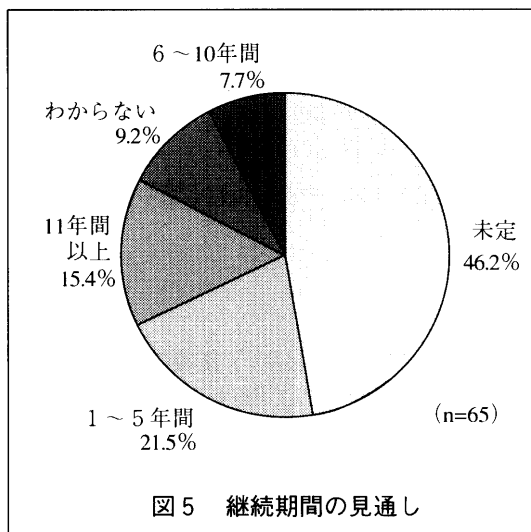


図5 継続期間の見通し

平成13年度の調査においても、平成4年度の調査(平成4年度が7.3%、平成3年度が19.5%、昭和63年度から平成2年度が11.0%)と同様、5年以内に教育目標を設定(改訂)

している幼稚園は4割弱であった。一方、11年以上前の平成3年度以前という幼稚園も44.6%あった(平成4年度の調査では39.1%)。

継続期間の見通しについても、平成13年度の調査と平成4年度の調査は同様の傾向を示した。すなわち、「1～5年間」が21.5%(平成4年度は22.0%)、「6～10年間」が7.7%(平成4年度は7.3%)であるのに対して、「未定」は46.2%(平成4年度は50.0%)であった。

したがって、新潟県内の幼稚園において、園の教育目標は、幼稚園教育要領の改訂のспанに合わせて改訂が行われるだけではなく、その幼稚園の設置の目的等とも関わる継続的・長期的なものとしても把握されているといえよう。

4. 教育目標の評価

平成13年度の調査においても、教育目標の評価の有無について尋ねた。その結果を、図6において示す。

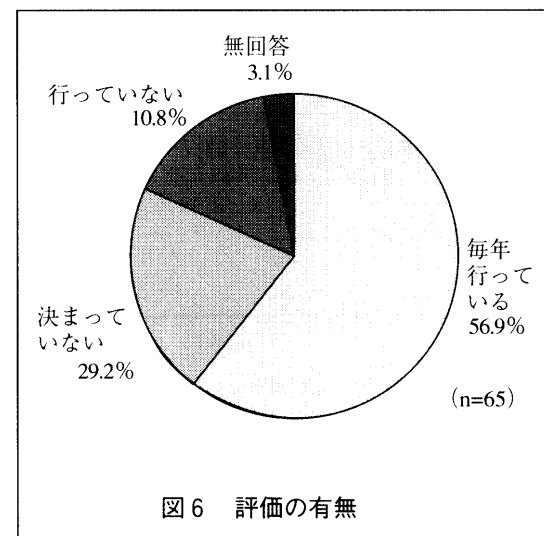


図6 評価の有無

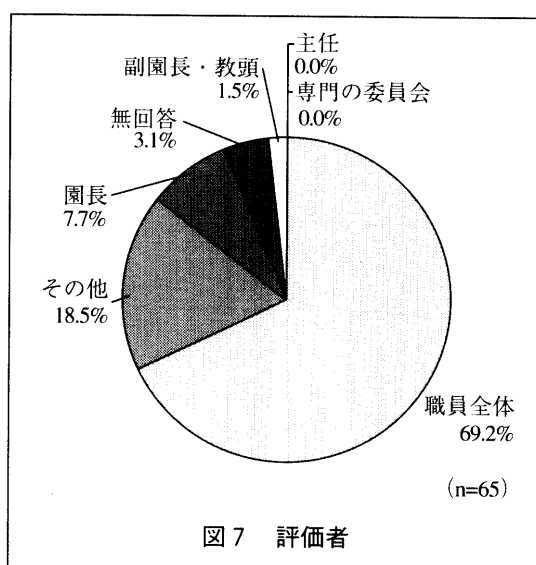
平成13年度の調査においても、平成4年度の調査と同様、「毎年行っている」との回答が6割程度あった。

そして、評価の実施の時期についても、平成4年度と同様、3学期中が最も多かった。すなわち、評価を行っているとする37園中、1月という回答が10.8%、2月が27.0%、3月が37.8%であった。

また、教育目標の評価者についても、設問「教育目標の達成度の見直しは、誰が行って

いますか」で回答を求めた。その結果を示したものが図7である。

なお、集計にさいしては、「園長」とともに「副園長・教頭」や「主任」などにもチェックがついていた回答は、「その他」とした。



平成4年度と同様、「職員全体」で評価を行うとする回答が最も多く、69.2%であった。その一方で、「専門の委員会」で行うという回答は皆無であった。これは、幼稚園に勤務する教職員数に起因することであると推定できる。

以上、平成13年度に実施したアンケート調査をもとに、平成4年度に実施した前回の調査との比較を交えながら、表現型、表現内容、設定(改訂)の時期及び継続期間の見通し、教育目標の評価という視点から、新潟県内の幼稚園の教育目標にかかわる具体的内実を解明してきた。

しかしながら、各幼稚園の教育目標に示されている価値内容のジレンマをいかに克服するのかという問題や、教育目標の達成度の測定可能性、年度の重点目標と教育目標との相関関係という問題については、今回、詳細な分析を行うまでには至っていない。これらは残された課題としたい。

最後に、年末のお忙しい時期にもかかわらず、今回の調査にご協力いただいた幼稚園の

先生方に、心より感謝申し上げたい。

註

- (1) 中川幸治、1990年、『学校の教育目標——設定から評価への構想と実際——』、栄町立栄中学校発刊事務局。
- (2) 中野啓明、1993年、「新潟県内における幼稚園の教育目標(1)」、『新潟青陵女子短期大学研究報告』、第23号、25-35ページ。
- (3) 中川幸治、前掲書、125-129ページ。
- (4) 「男女平等教育」と教育目標の関連については、以下の拙論を参照願いたい。

中野啓明、1996年、『『男女平等教育』における性概念の検討(1)』、『新潟青陵女子短期大学研究報告』、第26号、95-104ページ。

- (5) 保育実践におけるケアリングの内実については、以下の拙論を参照願いたい。

中野啓明、2001年、「保育者によるケアリング行動の分析」、『新潟青陵女子短期大学研究報告』、第31号、49-70ページ。